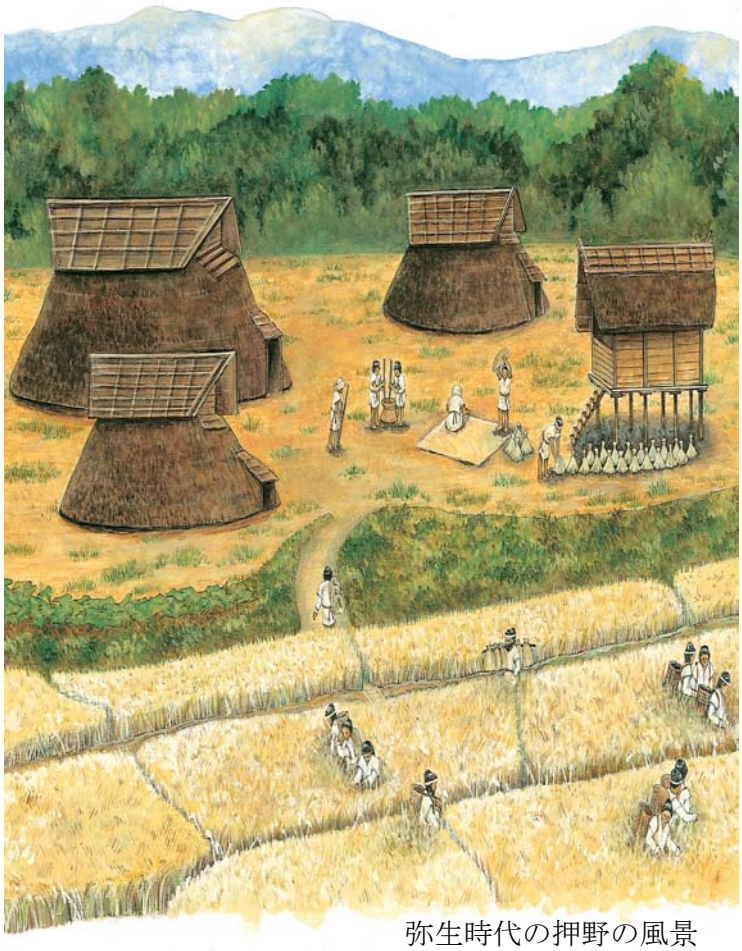
文化財企画展

押野のあゆみ



弥生時代の押野の風景

押野出身の力士 響 升 市太郎（ひびきますいちたろう）

2008文化財企画展　開催会場

1. 野々市町文化会館フォルテ　2階　セミナールーム
10月31日（金）～11月　3日（月）　午前9時から
午後5時まで[3日は午後4時まで]

2. 押野公民館　1階　ロビー
11月　5日（水）～11月18日（火）　午前9時から
午後7時まで[10日（月）・17日（月）は休館日]

3. 野々市町ふるさと歴史館　1階　第1展示室
11月19日（水）～11月27日（木）　午前10時から
午後4時まで[25日（火）は休館日]

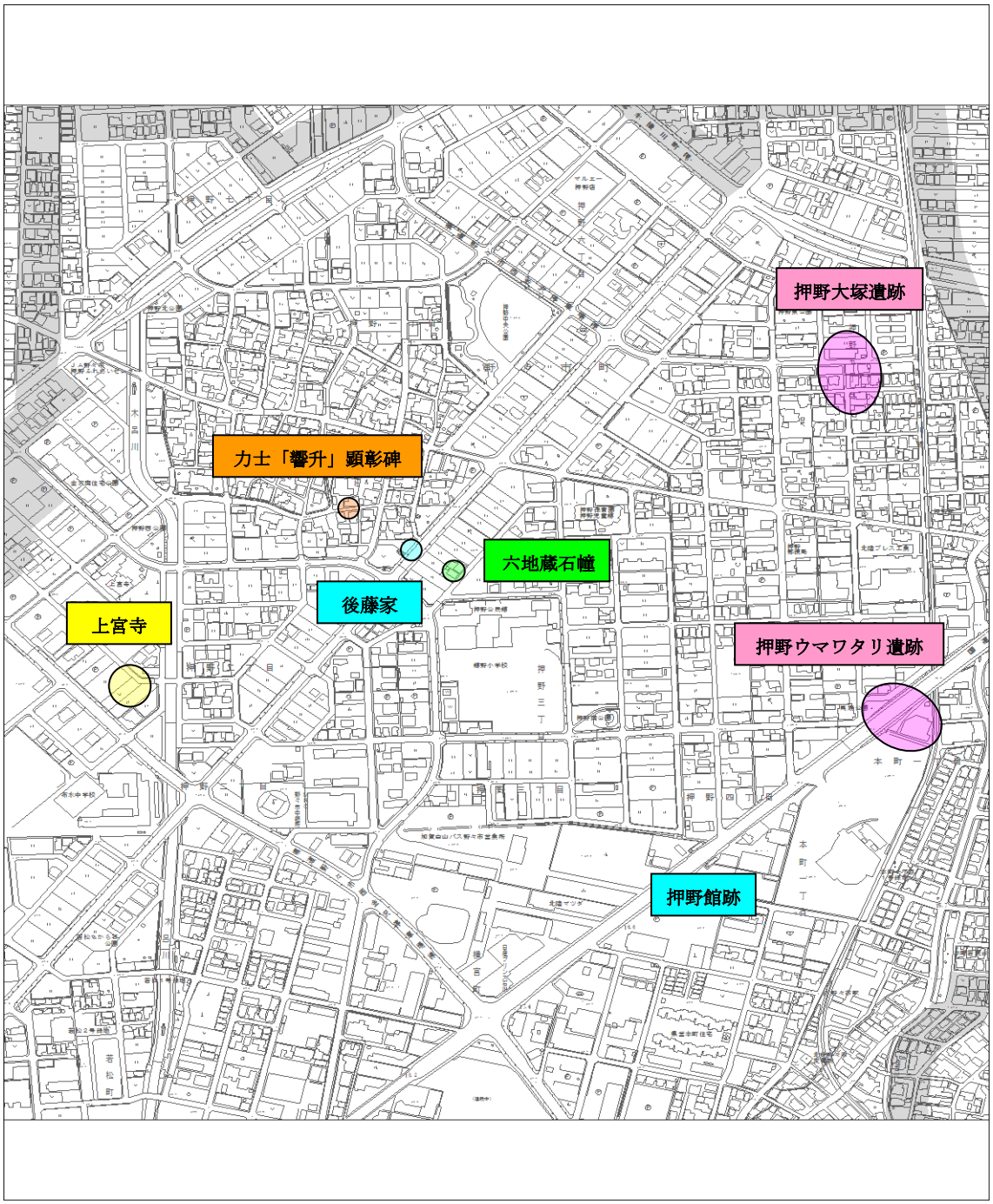
はじめに

野々市町は手取川（てどりがわ）の扇状地として形成された石川平野の要地に位置し、古くから豊かな歴史を育（はぐく）んだ土地柄でした。

町域は県内市町でも最も小さい面積ですが、その小さな町の中にもいろんな所で多くの先人（せんじん）の営（いとな）みを見ることができ、各地域の歴史が築かれていきました。

今回の特別展は町内の個別の地域に焦点（しょうてん）を当て、その地域の生い立ちからの移り変わりや今も各地に残る歴史的文化遺産を紹介していきたいと思います。

今年は、町の北東部に位置する押野（おしの）地域にスポットを当てました。



凡　例　遺跡　館・邸跡　寺院　石碑　石造物

押野の沿革

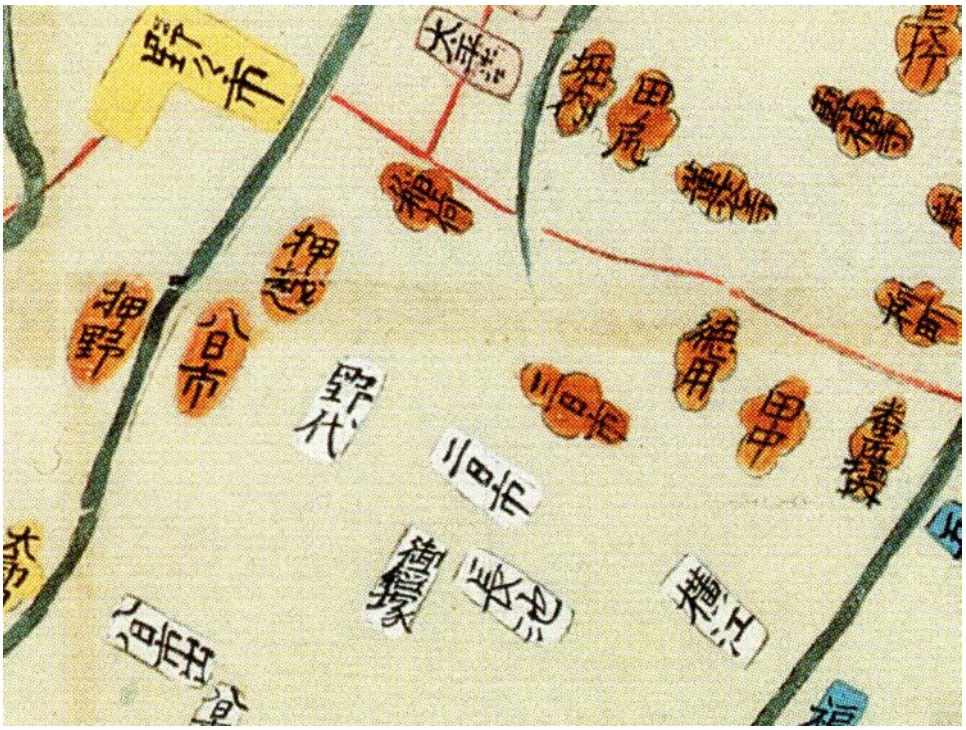
押野は野々市町北東端に位置し、金沢市の市街地に近接した近郊農村でした。村は、西方の旧本村と東部にある通称丸木（まるき）の枝村と 2 集落で構成されています。

押野地区の歴史は深く、押野大塚（おおつか）遺跡からは町内最古とみられる約 4,000 年前の縄文土器が見つかっています。また、弥生時代後半になると各地で集落が営まれ、発掘調査によりムラの性格が明らかになってきています。この地一帯は手取川から流れ出る伏流水（ふくりゅうすい）が湧（わ）き上がるところで、古くから人々の営みがあるのは、水の確保が容易であったからと考えられます。

押野大塚遺跡全景（昭和 56 年度調査）

押野の地名が文献史料の上に現れるのは鎌倉時代の正安4年（1302）です。摂津国勝尾寺（大阪府箕面市）の法眼継誉という人物が所領を盛俊という僧侶に譲り渡した証文に「かヽの国をしの庄」と記してあります。

また、この頃から地元武士団の富樫氏が勢力をもつようになりました。建武2年（1335）富樫高家は加賀国の守護となり野々市に館を構え、国内の政治を司るようになりました。貞和2年（1346）押野の地頭であった富樫家善は野市大乗寺の明峰祖哲に押野庄内の田地と敷地を寄進したことが明記されています。この富樫家善は富樫氏の庶流押野氏の祖とされ、その屋敷は館野小学校南東部にあったようです。

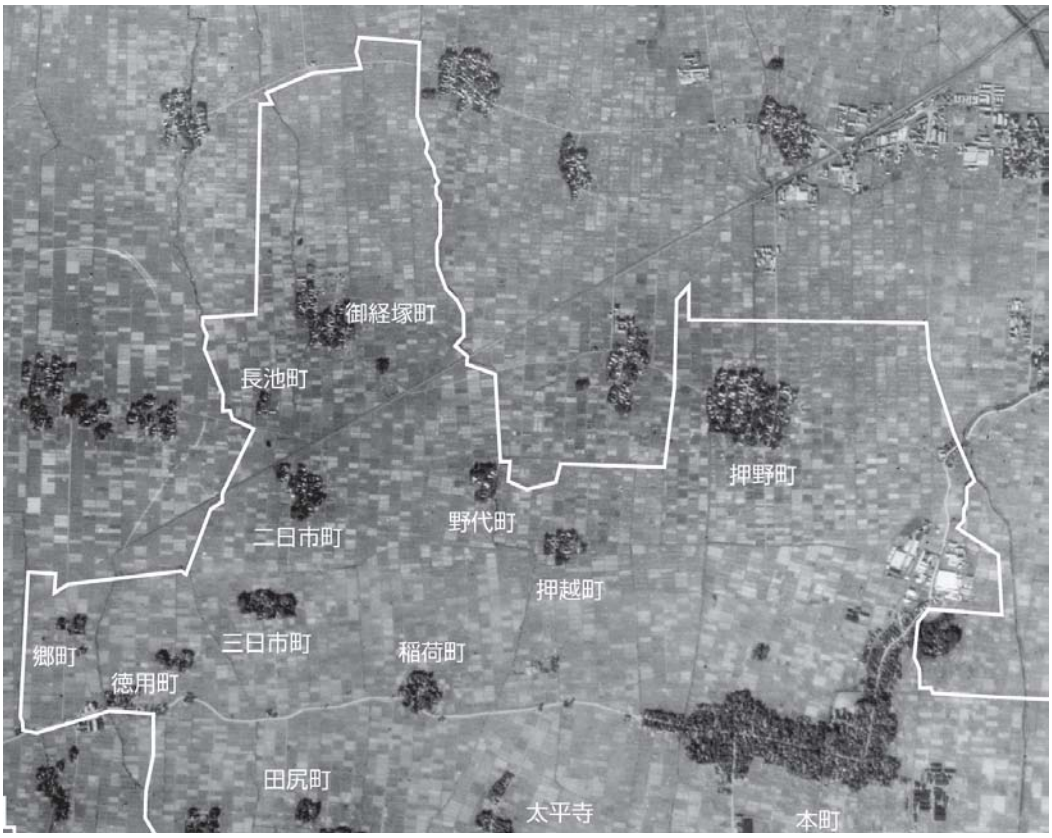


石川郡之絵図（江戸時代後期）

江戸時代の押野村の様子はいくつかの文献史料で分かります。貞享元年（1684）の押野村にいる本百姓の数は 30 軒、宝永5 年（1708）には家数 50 軒、本百姓 361 人と増加しています。

寛延3 年（1750）押野村安兵衛が加賀藩に上申した史料によると、押野村の産物は堅瓜と茄子であったようです。

明治時代の押野村は、明治 10 年（1877）頃に編纂された「加賀国石川郡村誌」によれば、戸数 119 戸、人口は 541 人（男子 266 人、女子 275 人）と記されています。



昭和 22 年（1947）押野周辺航空写真

縄文時代の押野

押野大塚遺跡

現在の押野 5 丁目、押野東公園より南東一帯にあり、縄文時代後・晩期の集落遺跡です。

遺跡からは細長めの石で囲った炉跡(ろあと)が 1 基見つかりました。おそらく建物の中にあったと思われますが、周りからはそれに伴う柱穴(ちゅうけつ)などは見つかりませんでした。使用された炉石の中には表面にいく筋の溝がみられるものがあり、砥石(といし)などに使ったものと考えられます。

炉の周りから縄文時代後期前葉(ぜんよう)の土器が発見されました。これらの土器は町内最古のものに位置づけられ、加賀地域ではあまり多く見つかっていないものです。

なお、遺跡の名称「大塚」は地区に残る字名「オオツカ」に由来し、この付近に古墳時代の墳墓(ふんぼ)があったためといわれています。

石囲炉

弥生時代の押野

押野ウマワタリ遺跡

北陸鉄道石川線と国道 157 号線が立体交差する地点から北西側にあります。弥生時代後半の竪穴建物(たてあなたてもの)3 棟、掘立柱建物(ほったてばしらたてもの)2 棟を確認しました。竪穴建物はいずれも五角形をしており、うち、2 棟は重なりあった状態で見つかったことから建替(たてか)えを行ったことがわかりました。

遺物は土器や石器のほかに管玉(くだたま)未成品やガラス玉が掘り出されました。

建替えられた竪穴建物跡

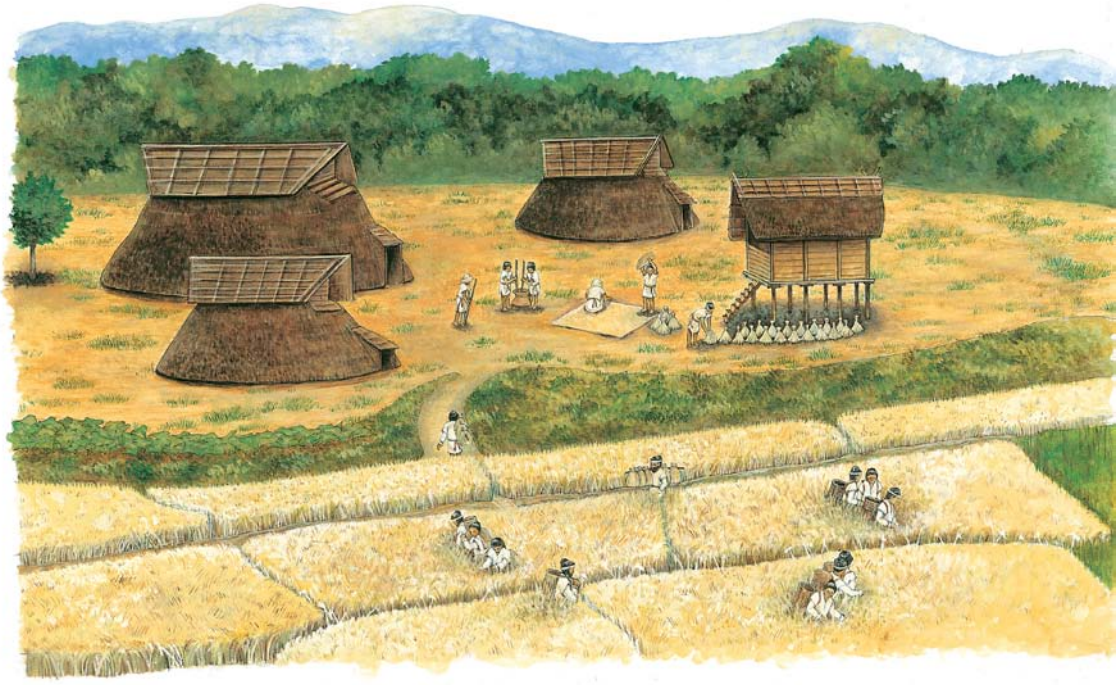
押野タチナカ遺跡

この遺跡は館野小学校のグランドから押野南公園を含む南東側一帯にあります。

弥生時代の中期～後期のムラの跡が見つかりました。

ムラの中には居住用の竪穴建物が 29 棟、倉庫に使われた掘立柱建物 11 棟が確認されています。竪穴建物は正方形、長方形、多角形の形があり、大きさも 10 ㎡～100 ㎡と大小様々です。形や大きさで建物の使われ方が違っていたかもしれません。

遺物は甕（かめ）、壺（つぼ）などの土器や石製品がほとんどですが、装飾（そうしょく）用の玉を作る原石なども少量ながら出土しています。



みのりの秋をむかえたタチナカのむら（イメージ）

中世の押野

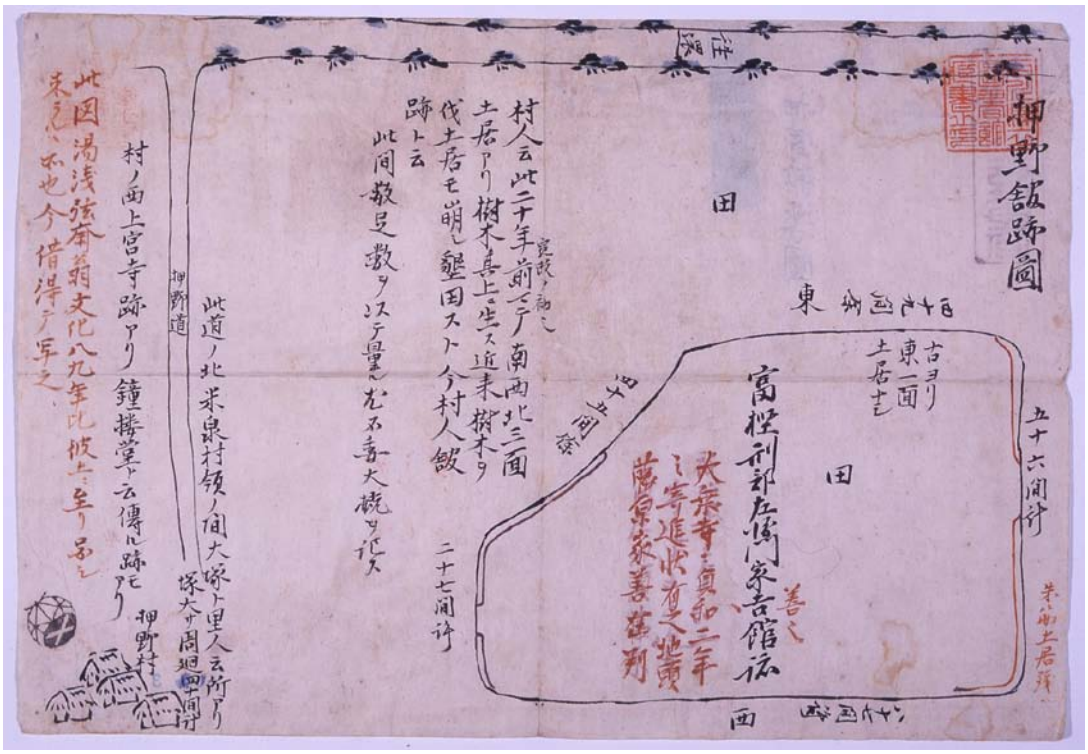
押野館跡（おしのかんせき）

押野南公園を含む一帯にある遺跡で、弥生時代の押野タチナカ遺跡と重なります。

この遺跡は、富樫氏の分家にあたる押野（富樫）家善の館の跡です。館は、敵の侵入を防ぐための大きな堀に囲まれており、広大な敷地をもつ内部には住まいの拠点となる大型の掘立柱建物、作業場と考えられる竪穴状遺構、飲料用の井戸などが見つかっています。

出土遺物は、国産の陶器や中国産の磁器などの容器のほかに、釘などの鉄製品も出土しています。

江戸時代の絵図に描かれている押野館は、台形 状の形となり、周囲に土塁（どるい）が巡（めぐ）っていたようです。



押野館跡絵図（石川県立図書館蔵）

屋敷を囲った堀の跡

屋敷内で見つかった掘立柱建物跡

地域に残る文化財

上宮寺（じょうぐうじ）

押野西公園の南側にあるお寺で、南北朝時代の唯性（ゆいしょう）というお坊さんが押野に寺を建てたのが始まりといわれています。戦国時代には上宮寺の僧たちが大坂の石山本願寺（いしやまほんがんじ）に出向いており、真宗（しんしゅう）本願寺とは密接な関係をもっていました。

江戸時代はじめには金沢に移りましたが、昭和５７年（１９８２）に創建（そうけん）の地となる押野に戻ってきました。

後藤家

後藤家は、江戸時代加賀藩押野村の十村役（10 か村程の村を治める長）となった家柄です。

後藤家歴代がはじめて十村役に任命されたのは慶安元年（１６４８）からで、明治期に至るまで代々この要職を務めました。その中でも３代太兵衛は明暦元年（１６５５）～万治元年（１６５８）にかけて泉野（現金沢市）を開墾して新しい村を創設し、寛文１１年（１６７１）には小原村から長坂用水を引いて灌漑の便を図るなどして農政に多大な業績を残しました。

六地蔵石幢（ろくじぞうせきどう）

押野集落の東側を南北に走る県道沿いにあります。本塔の石材は砂岩、高さは１２１cmで、六体の地蔵を半肉彫（はんにくぼ）りしています。この塔は追善供養（ついぜんくよう）を目的に造られたもので、下部に天保（てんぽう）２年（１８３１）と刻まれています。この石幢は町内に残る数少ない江戸時代の石造物のひとつです。

力士「響升（ひびきます）」

幕末から明治にかけて、一人の力士が活躍しました。力士の四股名（しこな）を「響升」といいます。響升は、文久（ぶんきゅう）３年（１８６３）の押野村で生まれ、力士となるため京都へ修行に出て、明治１３年（１８８０）東京の伊勢浜右衛門（いせがはまうえもん）に入門します。大きな体格を活かした強烈な押し切りを得意とし、明治２５年（１８９２）東関脇（ひがしせきわけ）まで昇ります。

現在、押野の鎮守（ちんじゅ）である高皇産霊神社（たかみむすびじんじゃ）境内に響升の顕彰碑（けんしょうひ）が建てられています。

響升市太郎の錦絵（石川県歴史博物館蔵）